研究所だより

荒井　絵理菜

人類の歴史上、一番暑い夏を過ごしています。「12万年ぶりの暑さ」は、コペルニクス気候変動サービスにより、樹木の年輪や珊瑚礁、深海の堆積物などから抽出した気候データをもとに推定されています。その頃の地球がどのような状態だったのか、興味が湧いて調べてみると、人間の古いご先祖様である、ネアンデルタール人が出現し、初期のヒト属による火の利用がみられた時期。産業革命が1760年頃から始まり、以降、人間による化石燃料の使用が急速に増加していった結果、わずか260年ほどで、私たちは地球全体の気温上昇を引き起こしていることになります。

以前、気候危機の現状についての報道特集を視聴した際、気候危機は単に地球が暑くなるということを指しているわけではないことが指摘されていました。自然災害の増加にはじまり、経済損失、食料問題、貧困や格差の増加、難民、紛争といった、あらゆる社会の混乱にもつながっています。

長い年月をかけて、地球全体の平均気温は14～15℃に保たれ、豊かな生態系が育まれる中で、私たちもその恩恵を受けながら生活し、社会的、経済的な発展をしてきました。自らの生存基盤を壊し続けている現状から抜け出すためには、際限のない資源の消費を引き起こしてしまう人間中心の社会システムから、地球の生態系を前提とした地域循環型の社会システムへの転換に向かう必要があり、協同労働、ワーカーズコープもその新しい社会システムを考える時のキーワードになると感じています。

気候危機と協同労働という働き方の関係性は、研究分野としてはほとんど深められていないテーマであり、これから、この切り口からの議論を増やしていきたいと考えています。また、元事務局長の相良さんが異動し、初めて相良さんのいない中での特集号になりました。「気候危機」という今まで協同総研として扱ったことのないテーマでもあり、どのような切り口で全体を考えたらいいのか、試行錯誤をしながらの編集作業でした。会員の皆さんからの、自由闊達なご意見をお待ちしています。

8/5の研究会後の送別会にて